# サバイバルゲーム・『アローン』

大津　隆文

子供の頃ターザン映画の人気が高かった。密林の中ただ一人で生き抜いていくヒーローに皆が憧れ、ターザンごっこに興じたものだ。

アマゾンプライムの『アローン』というドキュメンタリーは、厳しい自然の中での個人の孤独な生き方を描いており、最近はまっている。

基本的な仕組みは、応募者から選ばれた十名がバンクーバー島の秘境の海辺に一人ずつ残置され、最後まで残った一人が賞金五十万ドルを獲得するという趣向。許される携行品は十点までで、斧、鋸、ナイフ、火打金、釣り道具等は大抵皆が持参。

残置されてまず用意するのは寝る場所、次いで飲み水の確保と火起し。寒冷、多雨、多湿の場所ゆえ簡単ではない。最低限の生活が可能になると食べ物の入手。植物、木の実、茸、貝、海藻等、食べられるかどうかの見分けが死活的に重要だ。動物は罠で捕まるのはせいぜい鼠で、最大のご馳走は釣りや刺し網による魚（サーモン）。

参加者は渡された撮影機で自分の日常を自撮りしており、それを編集して放映。後方の支援チームには無線で常時連絡可能で、問題があれば直ぐに救出される。残置後短期間で脱落する原因は、体調不良や怪我、野獣（熊）の接近等だ。

参加者はサバイバルについてのノウハウの体得者が多く、大部分が生活を軌道に乗せる。長期戦での共通の課題は空腹との戦い、孤独感との戦い。日増しに痩せていく一方家族への思いが募っていく。空腹が長期化し体力が衰えると気力も衰える。最後まで残って賞金を獲得したいという願望は強いが、家族との再会の願いがそれを上回っていく。二～三ヶ月が限界のようだ。人は孤独**感**に耐えられない存在と痛感する。

同様のドキュメンタリーはネットフリックスも提供。こちらはアラスカで十六名が四チームに分かれ百万ドルの賞金を目指す『サバイブ・ザ・ワイルド』。チームなので内部での感情的葛藤、他チームへのおぞましい妨害工作（寝袋の窃取）等、人間組織の問題点も描かれていて興味深い。